

◇今年度の研究の成果と課題◇

I 研究全体について

1. 研究主題・サブテーマは適切であったか？

- 良い。
- 英語で培った発信する活動を他教科でもという主題は適切だったと思う。

2. 研究内容・研究方法・研究組織・研究計画は適切であったか？

- 良い。
- △授業研究の見通しがもう少し早い時期にもてると良かった。

3. 校内研究会の持ち方は適切であったか？

- 良い。

昨年度までの英語活動に関わる研究も生かした研究になるように「コミュニケーション」「発信する」という観点だけは継続して研究を進めた。

ただし、児童の実態を把握し、課題をみつけた上で、児童につけたい力を考えるということにもなったので、児童の実態把握に取り組んだ。

実態把握とその考察をもう少し早く進めることができれば、今年度の研究がもっと深まったと思うが、研究推進が遅かったので反省している。

II 授業研究について

1. 授業研の組織や回数は適切であったか？

(本年度は、代表して1本していただきました。)

- 本年度はよいと思う。(方向性を探る年だったので。)
- 本年度は、実態を把握し課題をみつけることが優先だったと思うので、やむを得ない。
- 回数は1本でいい。
- 自らの考えを発信する方策を丁寧にやっていけば、きっと力がつくという授業だった。
- △組織というよりは、個人(各学年)での取り組みになっていたと思う。

2. 研究主題の達成度について

(各学年の授業中の子どもたちの姿などから)

- 課題をはっきりさせるという意味では達成できたと思う。
- やればやっただけのことはあると思う。取り組みが遅くなってしまったので、もう少し早くとりかかればよかった。
- 意識してやればやっただけ、課題も見えたり成果も上がってきたりすると思う。
- △子どもたちへの還元は来年度への課題だと思う。

児童の実態把握に時間がかかりすぎてしまったために、授業実践の時期が遅くなった。そのため、授業研も予定より少ない1本になってしまった。授業実践への動きだしをもっと早くできれば良かった。

3年生の授業研や他学年の実践の様子を見ると、児童の実態から見えた課題に対して、支援の方法を考え実践することで、児童の力は伸びていたと思う。特に、3年生の実践では、「発信する」ために必要となる事柄をきめ細かに指導していた。その成果が表れ、「自ら発信する活動」ができるとともに、児童が相互に発信する「コミュニケーション」の活動もできていた。

また、実践を通して、さらに課題となる点も見えてきている。その点を来年度の研究に生かし、全体で組織的に研究していくことができるようにしていきたい。

III 英語活動・外国語活動について

○英語に対する意欲づけとして1～4年の英語はとても大切だと思う。

○来年度の本格実施に向けての最新情報などをしっかり把握し、円滑に実施できるようにしていきたい。

△電子黒板はとても有効なので、今後も活用方法を研究し、ソフト面を充実させる必要がある。

△職員の外国語活動に関わる研修ができればよかったと思う。

△5、6年生への下地作りを考えると、1～4年生もきちんとカリキュラムをおさえておかなければならないが、なかなか難しいところである。

△英語ノートに準じた教材を補充しておく必要がある。

外国語活動が正式に位置づけられるのは5・6年生である。しかし、これまでの研究からもわかるように1～4年生での活動が5・6年生につながることは明らかである。本校の特徴的な活動でもあるので今後も全学年で英語・外国語活動を続けていきたい。そのためにも、ALTの先生を活用したり、近隣の学校とも連携しながら最新情報を得るなどして、全職員での研修を積み重ねていく必要がある。

IV 本年度の成果と課題について

1. 成果

- 児童の課題（本校の課題）を客観的に把握できたことは成果だと思う。
- 学年の実態に応じて、話し合いの仕方、自分の意見の発表の仕方について指導できたと思う。
- 英語だけではなく、コミュニケーションについて全教科に目を向けられたのは良いと思う。学習での基礎が日常生活にも生かされるところがあると思う。
- 本校児童の欠けている力を洗い出し、それを鍛える場を考え出せたこと。
- これまでの英語活動でも関わってきたコミュニケーションを強化できるように考えてきたこと。
- 全クラスで実施した「QUテスト」は、「コミュニケーション」に関わる研究を進める上で効果的であった。「コミュニケーション」活動には学級経営がどのように進められているかが重要な割合を示すので、改めて学級経営のあり方を見直すことができた。
- 子どもの力を伸ばすには研究することが必要であるということが改めて確認できた。まずは、実践することが大切である。
- 子どもたちの国語力に関わって、読書の推進が積極的にできた。読書を通して、文型を覚えたり、語彙を増やしたりできるので、研究の推進にもつながった。

時間はかかったが、外部の人から見た学力面での実態、児童からのアンケート結果、教師から見た児童の様子など、多面的に児童の実態を把握できたことは今年度の成果である。わかったことは、

「しっかり話す」「正しく話す」

「自分の考えを伝える」

「聞いたことや読んだことをもとに自分の考えをもち、相手にわかるように話す」

といった力が児童に欠けているということである。これらは、昨年度まで英語活動のなかで強化してきた「コミュニケーション活動」とも関わりが深い。

そこで、「コミュニケーション」「話す・聞く」活動を英語以外の教科・領域に広げ、一人一実践できたことも成果である。

2. 課題

- 児童の実態から、さらに研究の方向性を焦点化し、具体的にテーマを設定して研究を推進していくことが必要だと思う。
- 今年度は1年目なので、来年度はいろいろな方法が練られると思います。インプットとアウトプットができる児童を育てたい。
- 一人一実践を行ったが、個人での実践になってしまったので、ブロックや全体会での検討時間を設ければよかった。

今年度把握できた「児童の実態」と、一人一実践の成果と課題をもとに、来年度に向けて、「教科・領域」や「支援方法」をより具体的にしぼって研究を進めていくことが課題である。

